

私は、ミカンが好きだ。ミカンの味が好きだ匂いが好きだ形が好きだ色が好きだ。皮を剥いた後、ほんのりと感じる酸っぱい香りが好きだ。先日、このようにミカンへの愛を友人に語っていた所、皮が剥かれ、房が分けられた状態で売られている冷凍ミカンなるものをおすすめされたのである。なるほど。果汁が凍ったミカンもシャーベットのようで美味しいに違いない。冷凍ミカンなるものにこれまでなぜ手を出さなかったのか、自分でもよくわからない。無意識下での加工食品に対する抵抗感だろうか？それとも皮をはがされ、彼らにとっては長年苦楽を共にしてきた、仲間たちを離れ離れにしてしまうという、資本主義の鬼たちによる聞くに堪えない残虐な行為に怒りを覚え、俺は最後の一人になっても抗うぞと心に決めたからだろうか？後者なら私の意思は食欲に負けたということになってしまうが、私は残虐な仕打ちを受けた同胞たち、冷凍ミカンを資本主義の鬼ストア(コンビニ)のカゴの中に入れたのである。また、資本主義の鬼ストアで同じコーナーにあった冷凍ブルーベリーたちも一緒に入れてた。私はブルーベリーも大好物なのだ。少し脱線するが、友人へブルーベリーへの愛を語ろうとすると、私の敵たちは「でも、ブルーベリーって実は目に良いというのは証拠が無いらしいよ」などと馬鹿げたことを言うのである。私はブルーベリーによる視力回復効果など興味などさらさらなく、一言も話していないのにも関わらずである。奴らはただ栄養を摂取するため食べ物を口にしていて、なおかつ自分以外もそうであると思い込んでいるのであろうか？恐らく違ふであろう。これは私の勝手な推測であるが、人の「好き」を論理らしいもので否定することで、自分が賢く、優れているように感じ、快感を得てしまっているのではないか？要は私はブルーベリーが食べたいから食べているのである。眼精疲労などそんなもの知ったことではない。そんなこんなで冷凍ミカンを買った私は、自宅に持ち帰り、食べてみることにした。これまでの大好物の進化系を味わえる可能性があるというのだからワクワクが止まらない。緊張で額が汗ばんできた。少し溶けてしまっていたので冷凍庫で少し冷やした。元々付着していた水分が凍結し、ひし形の氷となっている様子が美しく感じられる。そしてついに待ちわびた初対面。皮を剥かれ、何の苦労も無しにそのまま食せるようになってしまったあられもない姿の冷凍ミカン。そんな恰好なのによく堂々とできるもんだ。しばしの間、無言で睨み合った後、期待と緊張とともにかぶりつく。「シャクッ」凍った果肉による心地の良い音が一人の部屋に響き渡る。お。おいしい。うん。おいしいな...うん。うん。うん。う〜ん。美味しい、確かに美味しいのだが、これは私がミカンに求めているものではなかったのだろう。なぜか虚しさを感じてしまう。私は皮を剥くという過程も含めて好きだったのだ。もう何でもいから剥きたい。剥かせてくれ。これまで自分が好きなのはミカン単体であると認識し、疑ったことがなかったが、ミカンを購入してから食べるまでのプロセスも文脈も全てひっくり返して好きだったのだろう。だが、これは冷凍ミカンに対する批判ではない。何事も楽しめた方が勝ち。勝手に期待を抱き、しょうもないポイントで勝手に冷凍みかんに減点を与え勝手に落胆している私が悪いのだ。ああ、悲しい人間になってしまった。冷凍ミカンに憧れを抱いたくらいのところをやめておけば良かったのに。そうすれば冷凍ミカンは私の憧れとして存在し続けられていたはずなのに。好奇心と向上心は人を不幸せにする。余談だが、冷凍ブルーベリーは美味しかった。目の疲れが無くなった気がした。